

## 「恩人の最期」

昨年末、12月30日に仕事を教えてくれた恩人Nさんが亡くなりました。享年89歳。  
Nさんとは、前職の代理店で一緒にお仕事をさせて頂き、私が独立してからは2年ほど音信不通だったのですが、ひょんなことから私がお客様の一部を引き継がせていただくことに。

一昨年の秋、肺がんで余命3カ月だと知らされて、2025年は正月も迎えられないかも知れないと言われながら、そこから1年以上お元気でした。  
ホスピスに入るといふ知らせを受けたのが昨年11月。スグに駆けつけ、病室で2人きりで話しました。「もう、これでオサラバたい」と笑顔ながらも涙目で、僕が「(最後に)何したいですか?」と聞くと、「みんな(お客様)と会いたい」

それでお付き合いの深かったお客様に連絡すると、アツと言う間に、沢山の方がお見舞いに行かれました。生前、「24時間365日、いつでもご連絡ください。」と公言し、本当にそうしていたNさんならではの。

すると奇跡が起こるのです。2週間後にお見舞いに行くと、酸素ポンペを抱えながらも明らかに顔色がよく表情も豊かなのです。

たまたま入ってきた主治医がひとこと。「Nさん、とても調子良さそうですね。近いうちに退院の話をしませんか。ご家族を呼んでください。」  
「えっ?」ホスピス退院する人、初めて見ました。

もっとも親交の深いお客様は、「お前が危ないっていうから、ウチは一家全員で行ったのに、どげんしてくれるとや」とお叱りを受けたのも、今となっては良い思い出。そこから1か月ほどで天国へ旅立たれました。

Nさんのご長男さんとはご葬儀の日が初対面。

「子どもの頃は、遊んでもらった記憶があまりなく、休みでも深夜でもお客さまが事故だと知ると即座に駆けつけるので、父は警察官だと思っていました。」  
とおっしゃっていたのが、心に突き刺さりました。  
そんなご苦労の上に、今の私が成り立っていることに深い感謝の念が湧いてきました。

葬儀は大晦日。家族葬でご遺族以外の参列者は、私ともう一方のみ。大晦日前日を命日に選び、「お客様に知らせず、香典も受け取らないよう」言い残されていました。最後の最後まで、奉仕に徹底された人生でした。

「見事な死にようをした人は見事な一生を貫いた人である」  
或る本の一節が肚に落ちると同時に、自分自身の「最期」も考えさせられた大晦日でした。